1950　昭和２５年９月１日　　鶴研
雑誌　オール松竹９月号　　４頁

見出し［**僕のロケ記**］　筆者［鶴田浩二］　P1

「接吻第一號」中京へ行く　鶴田浩二

快晴に恵まれてフルスピードのロケ撮影！　あれこれやの苦心談！

6月[1]２２日（小雨）

本隊は昨夜出発してしまった。僕だけは中村組の「春の潮」の後篇につかまっていて一人だけ遅れて出発する。大勢でわいわい云い乍ら行くのはいゝが一人旅で名古屋迄行くのは一寸長い。昼間の汽車なのであんまり居眠りをするわけにも行かず時計と交互に見あきた沿線の風景をボンヤリと眺めるともなく眺めて居る。生れ故郷の浜松附近になって来ると子供の頃の想い出がなつかしくよみがえって来る。

此処迄来ればもう占めたものだ。目的地の名古屋迄あと一息。やっと名古屋へ着く、お城のなくなった名古屋、なんだが歯が抜けた様な淋しさを感じさせる。

宿へ来て見るとすでに佐々木康監督や久保プロデューサー、厚田キャメラマン等々が明日の天気を気にし乍らプランを練っている。ロケに随行した事のない横井宣伝課長も来て居る。今日午前中に「ミス中部日本」の審査会を終った処だと云う、中京美人を大勢集めて審査をしたとかで皆御気嫌がいゝ。

今度の映画はストリップショウの踊り子が逃避行をした為めに女雑誌記者と私立探偵が名古屋、静岡、伊東と転々と追いかけ乍ら、なんとなく二人の間にモヤモヤした感情が次第に濃くなって行くと云うストーリーなので、この中に名古屋のシーンで中部日本の代表的なお嬢さん達に特別出演して貰おうと云うのが佐々木監督の最初からのプランである、と云う事だ。それで珍らしく宣伝課長も一緒に来て居るのだとわかった。併しこれだけの為に来て居るのではなかった。それは追い追いわかって来た。

今日先着して居た桂木洋子さん（女記者、申し忘れましたが僕が桂木さんと張合う私立タンテイです）は早くも名古屋駅へ到着と同時にもうすでに一シーンクランクをしたそうだ。いつも乍ら佐々木監督のスピーディな演出には敬服する。梅雨期特有の小雨が降って居る。明日は雨で一日休養になるかも知れん。ゆっくりと名古屋見物が出来ると内心娯みつつ休む。

6月２３日

ここ数日、晴れた事がないのになんとした事だ、雲こそあるがピーカンだ、これでは休養どころではない。久保プロ氏はニコニコして居るがこっちはあてがはづれて内心では面白くない、併し仕事とあればそうも云って居られない。処へ横井宣伝氏が顔を出して「鶴田君、すまんが今日ロケが終ってから封切舘へ御挨拶に出てくれないか、支社から頼まれ

---

[1] 何月かは書いていないが文章に『「春の潮」の後篇（6月25日封切）』に、とあり『梅雨期特有の小雨が降って居る。』と書いている。1950年5月は少雨だった。ということで6月にした。

てね」と云って来た。道理で宣伝氏が来たわけだ。此処には松竹の中部支社があったッケ、と今になって思い出した処で始まらない。中京のファンの方々に御挨拶するのも大切な仕事だ、エイ、休養の方は後廻しにして、快よく引受ける。

午前九時から鶴舞公園でクランクを始める。到着して三十分位の間に四、五カット撮ってしまう。佐々木監督一流のキビキビした進行振りである。僕と桂木さんの役はお互に反撥し乍ら踊り子を尋ねて歩く一種の道中記風の作品なので此処で又々いがみ合った挙句に遂に

彪太（僕です）「つまらない意地を張らないで……」

珠子（洋子ちゃん）「放して頂戴」

彪太「もう一度、坐れよ」

珠子「放さないと大きな声を出すわよ」

彪太「出してもいゝから、もう一度……」

珠子「泥捧……」　と云う事に相成って、彼女の金切声をきゝつけた警官（磯野秋雄さん、彼は十五年位の俳優生活中、警官になったのは始めての由）に軽犯罪法とやらの現行犯として連れて行かれてしまうくだり迄、お天とう様の御気嫌をうかゞいつゝ撮るは撮るは昼食もなんのその、午後二時頃迄かかって一気に撮り上げてしまう。急に来た暑気の中で流石のスタッフ一同もやゝグロッキー気味になった処でチョン。

これで終ったわけではなく、更に車を飛して名古屋城へ向う。戦災であたら名城も烏有に帰してしまったが残って居る出櫓を背景にして比処でも又々洋子ちゃんといがみ合いのシーンを二十数カット撮りまくる。前の鶴舞公園は今一般人は立入禁止になって居るのでスムースに行ったが、今度はもう何処から聞いたのか熱心なファンの群が殺到して来て、その整理に宣伝氏迄も一役かってドラ声をはり上げている。

ファンがアレヨアレヨと云って居る間にサッと切り上げて（と書くといかにも楽なように思えるが、洋子ちゃんと二人炎天で丸二時間休みなしで演技をして居るのは、役者稼業も楽じゃないと思う。）もう宿へ引き上げるのかと思ったらサに非ず、もう一カット中京のメインストリート広小路で洋子ちゃんが円タクから降りるカットを撮る事になる。お天気が親の仇じゃあるまいし、そう眼の仇にして追い廻さなくてもよさそうなものだとそろそろボヤきたくなって来る。

このシーンに僕は用なしだからバスの中で、のんびりして居たらファンのサイン攻撃を受けてもう一汗かく、併しファンは有難いものだ、僕の様な馳け出しでも、鶴田鶴田と親しみをこめた声で呼んで呉れる。それに応えるべく猛然と次から次へと出される、手帖、ハンカチ、紙片にサインをして行く。

撮影が終了したのが五時だ、未だ日は高い。流石に疲れは多少見せているが梅雨期に珍らしい好天候に恵まれてスタッフの面々は御気嫌がいい。仕事をし終った悦び、働く者だけが知る悦びを感じて宿舎に帰る。夕食が済んでホットする間もなく支社からの注文の封切館への御挨拶に出掛ける。今夜は三館で、明日が四館のスケヂュールだそうだ。

ここの太宰支社長は元々宣伝部出身の人で横井宣伝氏などの大先輩の由、だからロケバスの飾りつけや、新聞紙面の利用など至れり尽せりで、或館の前などでは立往生する位に

ファンが集まって我々一行を待っていた。御挨拶は桂木洋子さん、西條鮎子さん（彼女が失踪するストリップガールである。）司会の磯野秋雄、他に松平二三子、佐々木恒子、高間幸子、寺岡潔の諸君諸嬢の大一座？　である。十時に宿舎に帰りつく、本日の労働時間は正に十三時間……皆さんお疲れさま……

6月２４日（晴）

今日も亦々晴。例によって八時半には出発する名古屋駅前のシーン、大船を発つ前に改札口の処をセット撮影して来た、その続きのシーンだ、改札口が大船にあって出口は名古屋でと云う案配である。上衣を裏返えしに来て飛び出して来た僕を娘さんが見てクスクスやる処である。あわてた御見物の一人が

「こりゃ野球映画だよ」

「どうして」

「だってあんな派手なジャンバーを着いて居るもの」　裏返しの上衣をジャンバーに見立た処はなかなかいいセンスではある。

刻々に数を増すファンを気にしつゝ、猛スピードで撮影を終って市庁舎に車を向ける。この頃にはロケ隊の消息が大分徹底したものか、すでに千名以上のファンが待ちかまえて居る。此のシーンは警察暑の前のつもりなのだが警察の前を使えない為に急遽変更されたものだ。昨日交渉した時は署長さんはＯＫと云って表にある掲示板もきれいにしましょうと大変はりきってくれたんだが、県の何とか云う係のお役人がどう感違いをしたのか警察の前で接吻されては困ると云って許可をくれない。

冗談じゃない、この映画で接吻の出て来るのはラストシーンだけなんだのにと台本を読んで貰ったりして色々と諒解を求めた末の返答が、「どうも『接吻第一號』と云う題名が……」と云う理由で何としても許可してくれない。苦労人の佐々木監督は「あゝ、いゝです。いゝです。何処かビルの中から撮りますから。何、前のカットが留置場のセットシーンですから、何処のビルでもいゝですよ」であっさり変更になったわけだ。民主々義の今日この頃には珍らしい嘘の様な本当の話。

こゝが終れば午後駅の構内を残すだけなので一息入れてホットして居ると、又も宣伝氏が現われて

「浩ちゃん（あんまり猫なで声を出すないと思って居ると）、午後ホンノ一寸でいゝから名古屋城で中日主催のカメラデーがあるからモデルに出てくれよ」　と来た、よくもまあ次から次に利用法？　を考え出すものだ。

午後の構内のシーンを撮り終って宿へ帰ったら三時だ、スタッフの人々は更に又車を駆って公会堂の表、市内の情景等の俳優の出ないシーン（ヒロイと云って居ますが）の撮影に出掛けで行った。そしで五時にはもう静岡へ出発すると云う強行スケヂュールには頭が下る。珍らしく夕方迄のんびり出来てホットする。御挨拶廻りが今日は四館、昨夜より更に物凄いファンの歓迎を受けて時間はどんどん延びて行く、帰りついたらもう出発迄に二十分しかないと云う、スタッフの人々と同様の離れ業だった。

随分忙しい思いをした名古屋ロケではあったが、予想外のファンの歓迎を受けてすっか

り気をよくして
「宣伝課長さんよ、もう何かお役に立つ事はありませんか」と水を向けたら
「うんいや御苦労様でした、充分成果を挙げられたよ、……あっそうだ忘れて居たよ」
　未だ何かあるのかとギョットした僕が、「何んです」
「放送を利用する事を忘れて居たよ」　ジョ冗談じゃないこんな人にはお世辞も皮肉も通用しないものらしい。軽口をきいて居る間に連日の疲れかウトウトと始めてしまう。
　撮影中で本当の書きなぐりで恐縮です。